



終戦記念日

8月15日、平成最後の73回目の終戦記念日を迎える。戦争を知らない時代に生まれ育った私たちは「過去のこと」と思い込んでしまいがちになっている。生きる事の意味なども忘れさせ、失わせてしまう戦争の悲惨さが現実のものとならないために「後世に残し語り継ぐことの大切さ」を私たちは考えていかなければない。



今の平和な時代に生きる私たちに出来ることは何か！
平和の大切や、後世に語り継ごう！



きょう八月十五日は戦没者の方々を追悼する日であり、また同時にどついたら戦争をなくせるかを考える日でもあるでしょう。二つの事例を引こう。

一つめは、核兵器に関することである。

英国とアルゼンチンが戦ったフォークランド紛争ではこんなことがあったという。

英国の駆逐艦、シェフィールドが、アルゼンチン軍の発射したフランス製ミサイル・エグゾセで撃沈された数日後の一九八二年五月七日、フランスのミッテラン大統領はサッチャー英首相から電話をもらったそうだ。

核持つ国の絶対優位

ミッテラン氏ばかりつけの精神分析医アリ・マグディ氏のところへ予約より遅れて到着し、言い訳した。

「すみません、先生。鉄のご婦

東京 2018・8・15

社説

人との諍いを取めねばならなかったもので。我々がアルゼンチンに売却したミサイルのレーダーを無効化するコードを渡さなければ、四隻の原潜でアルゼンチンを核攻撃すると脅すんですから。核戦争を引き起こすなんて。私は引き下がりましたよ。(東京大学出版会UP4月号、長谷部恭男氏「巡洋艦ベルクラーノ撃沈 一九八二年五月二日」より要約)

精神分析医の著作(日誌)にある話で電話の有無、内容は間接情報であって真偽はわからないが、ありえる話である。

そつたとすれば、核兵器は実際には使われないにせよ、核の力をもって英国は戦争を有利に導いたこととなる。

過去の話にせよ、核の威力は絶大で、核保有国は非核保有国に対し絶対的優位にあるわけだ。その威力は少なからぬ国々にひ

そこに核を持ちたいと願わせ、実際に保有国を誕生させた。

反核のつねり始まる

北朝鮮もその一つである。核の威力をもってアメリカを振り向かせ、独裁体制の保証という果実を得ようとしている。

それと正反対の世界的動向が非核保有国が集まって進める核兵器

禁止条約である。核兵器の開発・保有・使用などを法的に禁止し、昨年国連で採択された。ただし各国の批准は進んでいない。

平和をつくるために

終戦の日を考える

絶、人類の破滅。サッチャー氏の逸話などは過去のものとし、核時代を非核の時代へと反転させる意思を世界は持つべきだ。そのうねりは始まっている。

もう一つは、私たち自身のことである。敗戦の後、憲法九条をマッカーサー司令官とともにつくったとき

一九〇五年九月、日露戦争の講和直後のこと。ロシアから賠償金もとれなかった講和を屈辱外交と非難する東京

の不公平、非人道性への倫理的拒

やなく、一方国民は徴兵と戦費のための増税で苦しんでいた。

「外交五十年」より

小村には国民の反発は予期の通りだったが、故郷宮崎県飲肥の村に帰って驚いたそう。各所に小さなテールが出て酒が一杯ついである。小村の酒好きは知られて

「東京では大騒ぎしたぞうですが、騒ぐ奴らは、自分の子供を戦争にやった者ではあり

た一人も戦地におりませぬ。私は子供が三人あり、そのうち二人は満州で戦死し、残った一人も戦地におりませぬ。みんな犠牲になるものと諦めておりました。お陰で一人だけは無事に帰って来ることになります。全くあなたのお陰でございます。」

洋服にすがって泣き、同じ光景が二、三あったという(幣原喜重郎「外交五十年」より)。

外交官の苦悩が語られ、同時に戦争のもたらす根源的な悲しみが語られている。

戦争は政府にとつては政治であり勝敗であるのだから、家族や個人には人の生死でしかない。国家を主語とした威勢のいい話は一時耳に心地よいかもしれないが、注意せねばならない。近隣国への反感をおおる政治家の言葉はよく聞き分けねばならない。

戦争より外交である。武力より対話である。戦争が多くの人の命を奪うのなら、外交は多くの人の命を救うことだってできる。何も理想を言っているわけではない。反戦は普通の人々の現実である。国家を平和へと向けさせるのは私たちの判断と意思である。